

小学校第3学年 算数科 単元名「わり算」 ～一人一人のニーズに合わせた合理的配慮の事例～

1 本単元で人権教育を進めるにあたって

本単元は、小学校学習指導要領算数の目標「除法の意味について理解し、その計算の仕方を考え、用いることができるようにする」ことを受け、除法が用いられる場合について知ることや、除法と乗法や減法との関係について理解し、除数と商が1位数である除法の計算が確実にできること等をねらいとしている。

本学習では特別支援学級在籍児童が、通年、通常学級の授業に参加している場面を設定している。児童一人一人のニーズに合わせた合理的配慮をし、自分のもてる力を十分に発揮して課題解決を行い、それぞれが自分の考えを率直に表現して目標の達成を図っていく。互いの考えの相違を認め合い、大切にしよう活動は、人権感覚の育成につながると考える。

特別支援学級在籍児童と通常学級児童が、互いに具体物を分けたり図示したりする活動を通して、児童一人一人がわり算の意味や計算の方法を理解し、それぞれの自己表現の仕方があること、協力して活動していくことの意味と大切さを理解させていきたい。

2 単元の目標

具体物を等しく分ける活動を通して、わり算の意味を理解してそれを使えるようになる。また、わり算の計算は乗法の逆算とみることができるようになり、商が1位数になるわり算の計算ができるようになる。

3 人権教育を通じて育てたい資質・能力

互いの相違を認め、共同して活動することができる。(技能的側面)
一人一人がかけがえのない存在として大切にしようとする。(価値的・態度的側面)

4 指導のポイント

(1) 人権感覚を育てる上で大切にしたいポイント

- 聴覚障がい、肢体不自由があることによる学習上の制約・制限を周囲の者が取り除いたり減らしたりする。
- 児童一人一人がもてる力を発揮し、自分の目標を達成できる活動を取り入れ、主体的に活動できるようにする。
- 一人一人に違いがあることを認め、互いに自分の表現方法で考えを出し合うことができるよう、よい雰囲気を作る。
- グループ活動を取り入れ、自分の考えを率直に出せるようにする。また、自分の考えに固執するのではなく、互いの考えを肯定的に受け止め、学び合い、高め合い、協力しながら解決していけるよう指導する。

(2) 人権が尊重される授業づくりの視点

- ①自己存在感
具体物を分ける活動を設定したり、図や絵で自分の考えを表現させたりして、一人一人が考えを出しやすくなる支援を行う。
- ②共感的人間関係
全ての児童の発言や活動が尊重されるようグループ活動を設定して、一人一人がそれぞれの考えを表現し、共感的に受け止められる人間関係を育てていく。
- ③自己選択・決定
教師が様々な表現方法を提示し、児童が自分に応じた表現方法を選択できるようにし、達成感をもつことができるようにする。

○児童の実態



【 難聴特別支援学級在籍 Aさん 】

Aさんは、普段は、FM補聴器（※注1）を付けて学校生活を送っている。正面からゆっくり話しかけると聞き取ることができる。自立活動でコミュニケーションに関する活動を行うため、国語科は特別支援学級で受け、その他の教科、領域の学習は通常学級で受けている。他にFM補聴器の使い方や管理、言語の形成や表出についての活動も自立活動で行っている。

（※注1）FM マイクからの声を電波で受信して聞くことのできる補聴器



【 肢体不自由特別支援学級在籍 Bさん 】

Bさんは、車椅子を使って生活をしている。上肢機能は維持できているが、手指機能の低下が少しずつ見られる。教室移動にはエレベーターを利用している。国語科と体育科は内容の一部を、その他の教科、領域は通常学級で受けている。特別支援学級では、下肢機能の改善を図るためにウォーカー（※注2）を使って歩行に関する学習をしている。併せて手指機能の低下を防ぎ、維持するための活動も自立活動で行っている。

（※注2）歩行器

5 学習の流れ

(1) 指導計画（14時間取り扱い）

学習活動	人権尊重の視点を踏まえた指導上の留意点等
1 既習事項のかけ算の確認をする。	○「何個のいくつ分」ということを押さえて、かけ算九九の確認を行わせる。 ○苦手な児童には、九九の表を準備する。
2 等分除の意味を理解し、わり算の立式の仕方について知り、計算方法がわかる。 【3時間】（本時1／3）	○「わける」の意味を捉えさせるために、具体的場面を設けて、具体物を操作し、自分の生活経験と重ねて考えることができるようにする。
3 包含除の意味を理解し、わり算の立式の仕方について知り、計算方法がわかる。 【2時間】	○一人一人の考えを出せるよう、グループ活動を行い、考えを出しやすくする。

	○グループ活動を行う際は、お互いの考えを肯定的に受け止め、学び合い、高め合いを大切にさせる。
4 わり算の式とかけ算九九との関係を知り、適切に計算できるようになる。 【3時間】	○等分除、包含除のどちらの式も、かけ算九九を使って計算できることを理解し、その計算ができるようにする。 ○計算の苦手な児童に、九九の表を準備する。
5 等分除と包含除の意味を理解した上で、わり算の問題を作る。	○問題をつくった意図や背景を可能な限り含めて提示させる。問題に含まれる児童の思いを知った上で解答を導いていくようにする。 ○共同して課題解決するようにする。 ○グループ活動等を行う際は、お互いの考えを肯定的に受け止め、お互いの考えを尊重し合いながら解決させるようにする。
6 わり算を使って倍を見つけたり、2桁÷1桁の計算もできたりすることを理解し、活用することができる。 【3時間】	○わり算には様々な活用法があることを、身近な生活事象と関連付けて理解させることで、物事を合理的に見ていく資質を育てていく。
7 練習問題を行う。	○わり算の計算の習熟を図る。

○合理的配慮の実例（例）



【 難聴特別支援学級在籍 Aさん 】

年度当初に静かな教室環境づくりを、通常学級担任間で共通理解のうえ環境整備するとともに、一斉指導の際はFM補聴器を使い、グループ学習ではAさんの正面からゆっくりと話すようにした。

また、グループ活動の際は、活動内容や一人一人の考えをホワイトボードに記入して伝え合うようにした。通常学級にも視覚的な支援を要する児童が他に在籍しているため、他のグループにもホワイトボードを配付することにした。



【 肢体不自由特別支援学級在籍 Bさん 】

Bさんが通常学級に出入りしやすいように、ドアレールの段差をなくすとともに、話合いの結果、座席の位置を教室後方の廊下側に設置した。

また、車椅子のまま使える幅の広い、座高に応じて高さを調節できる机を準備した。この単元の授業では操作活動を行うため、Bさんの上肢が動く範囲内で操作ができるようトレーを準備し、操作する半具体物もBさんが握りやすい大きさで、厚みのあるものに揃えた。同様に机上の整理が苦手な通常学級児童のために、他のグループにもトレーを配付したり、グループ内で記録係を決めたりして、Bさんの考えを記録できるようにした。

(2) 人権尊重の意識と実践力を養う学習活動例 (2 / 1 4 時間目)

目標

◇全体の個数を等しく分けるとき(等分除)に、わり算という考え方を使うことができることを具体物の操作を用いて理解する。

人権教育で育てたい資質・能力

◆様々な方法で自分の考えをもち、それをもとにして協力して解決していくことができる。

主な学習活動	○指導上の工夫・留意点 評価◇◆ ●特別支援学級担任の動き	備考
<p>1 本時の課題をつかむ。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>1 2このあめを、3人に同じ数ずつ分けると、1人分は何になりますか。図やブロックで表してみましょう。</p> </div>	<p>○学習の見通しを持たせるために、学習の流れを提示する。 ○それぞれに、同じ数ずつ分けるという点を意識させ活動を焦点化する。</p>	
<p>2 自分の予想を立てて、問題を解決する。 (1) 全体で友だちの考えを聞く。 (2) 自分の方法で解決する。 【(例1) 参照】</p> <div style="border: 1px solid gray; border-radius: 50%; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・1こずつ、おさらにおいてみよう。 ・1つのおさらには2こずつくらいおいてもだいじょうぶかな。 ・1つのおさらには5こくらいおいて、すくないところにわけていこう。 ・4こになるかな。 </div>	<p>○操作活動を通して、自分の考えを持つために十分な時間を確保する。 ○身近な問題と捉えられるよう具体物を使い、図や絵を描くためにホワイトボードを用いる。また、動かして示すための半具体物を準備して、考えを伝えやすいようにする。 ●特別支援学級在籍児童に、手指の滑らかな動きを意識させたり、指示を明確に伝えたりして、活動がしやすい環境を設定する。 ●特別支援学級在籍児童の学習についても触れ、共感的に通常学級児童が活動を見ることができるようにする。</p>	<p>ホワイトボード ブロック トレー</p>
<p>3 共同解決する。 (1) グループで考えを出し合う。【(例2)(例3) 参照】 (2) 全体で考えを出し合う。</p>	<p>○それぞれの考えを出し合う中で、共感的な態度を養い、共同して解決していく楽しさを感じさせる。 ○自分の考えをうまく表現できない児童のために、考えを一緒に整理するなど、しっかりと関わる姿勢を大切にさせる。 ○発表する際は、自分の考えを相手に理解してもらうために、ゆっくりはっきり伝えるようにさせる。</p>	<p>ホワイトボード ブロック トレー</p>

	<p>●他の児童の支援にもあたる。</p> <p>◇4個ずつ3つの皿に等しく分けることができる。</p> <p>◆表現可能な方法で考えを示すことができ、協力して解決している。</p>	
<p>4 本時のまとめ</p> <p>(1) 個々の考えを整理してわけ方をまとめる。</p> <p>【(例4) 参照】</p>	<p>○分ける方法はいろいろあるが、等しく分けられることに気付かせ、次時の立式の仕方につなげる。</p> <p>○自分の考えを表現するために、一人一人が頑張っていた姿を認め合う。</p>	

主な学習活動の具体例

(例1：学習活動2 特別支援学級担任の通常学級児童 Cさんへの関わり)

①あれ?どんなに分けたらいいんだろう。先生教えてください。

②Cさん、よく質問してくれましたね。1こずつお皿に置いていきましょう。

③1こずつ置くと・・・あっ!全部分けられました。ありがとうございます。

Cさん

特別支援学級担任

(例2：学習活動3 班内における難聴特別支援学級在籍 Aさんへの関わり)

②先生の声やみんなの考えが、Aさんに伝わるよう、ゆっくりはっきり話そうね。大きな音を立てないように。

③問題は何かな。

④Aさん、このホワイトボードに書いてあるよ。わたしが読むね。

⑤Dさん、Eさん、Fさんに1こずつ配ってみます。

⑥みんなに配りました。みんな4こずつになります。Dさんはどうになりましたか。

⑦わたしも4こずつです。ホワイトボードに考えをまとめてみたよ。

⑧Dさん、自分の考えをホワイトボードにまとめてみましょう。発表の練習もしてみましょう。

⑨Dさん練習するから、聞いてください。

⑩Aさん、もっとゆっくりでいいです。

⑪Dさんありがとう。

Dさん

Aさん

特別支援学級担任

(例3：学習活動3 班内における肢体不自由学級在籍 Bさんへの関わり)

特別支援
学級担任

②広い部分をつかむとにぎりやすいな。



Bさん

③Gさん、Hさん、Jさんに
1こずつ配ってみます。

①1こずつ1つのお皿に置いて
いくよ。Gさん、Hさん、J
さんに配ってみようね。どこ
をつかむといいかな。



Hさん

④先生、Bさん上手ににぎって
いますね。いつもどんな練習をして
いるのですか。

⑤指先に力を入れてつかみ、放す時に指
を開く練習をしているよ。

⑦Bさん、ほくに1こください。もう少しひ
じをのばして、わたしの手のひらにのせ
て。

⑥残ったブロックも1こずつGさん、
Hさん、Jさんに配ってみましょう。
指の力を抜かずに、ひじをゆっくり
と伸ばしてみよう。

⑧みんな4こずつだね。Hさん、配っ
た4このブロックを今度はほくの手の
ひらにのせてください。



⑨Hさんからもらった4
このブロックをお皿に
置いてみましょう。



Hさん

⑩Bさん、手のひらをゆっくりと下に向けて、
ブロックをお皿の上に転がすようにすると
いいよ。



Bさん

⑪うまくできたよ。
ありがとうHさん。

(例4：学習活動4 通常学級担任の肢体不自由学級在籍 Bさんへの関わり)

通常学級担任



Bさん

②グループのGさん、Hさん、
Jさんに、このように1こず
つ配りました。1人分は4こ
になりました。

①BさんのグループはBさんが
発表します。お願いします。



③Bさんはホワイトボードに書いて説明してくれ
ました。発表もはっきりとできました。

6 資料

- 啓林館 「わくわく算数3上」わり算 pp. 14～31
- 東京書籍 「新しい算数3上」わり算 pp. 24～37

学習シート（例）

第3学年 算数科 「わり算」

	年		組	
--	---	--	---	--



今日のもんだいは
「12このあめを、3人に同じ数ずつ分けると、1人分は
何こになりますか。」

1 自分の考えを絵や図をつかってかいてみよう。

2 下の図をつかってかくにんしてみよう。

あめ 12こ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○

○ ○

さら

さら

さら



一人ぶんは

今日の学習のふりかえり	よくできた◎	できた○	もうすこし△
自分の考えを出せましたか			
友だちの考えを聞けましたか			
みんなで力を合わせて考えましたか			
(かんそう)			

我が国は、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し合える共生社会の実現を目指しています。そのためには、障害のある人と障害のない人が互いに理解し合うことが不可欠であり、障害のある子どもたちと障害のない子どもたち、あるいは、地域社会の人たちとが、ふれ合い、共に活動する機会を設けることが大切です。

障害のある子どもが幼稚園、小学校、中学校、高等学校等（以下、「小・中学校等」という。）の子どもと共に活動することは、双方の子どもたちの社会性や豊かな人間性を育成する上で、重要な役割を果たしており、地域や学校、子どもたちの実態に応じて、様々な工夫の下に進められてきています。

小・中学校等や特別支援学校の学習指導要領等においては、障害のある子どもと障害のない子どもが活動を共にする機会を積極的に設けるよう示されています。

障害のある子どもと障害のない子どもと一緒に参加する活動は、相互のふれ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする交流の側面と、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習の側面があるものと考えられます。「交流及び共同学習」とは、このように両方の側面が一体としてあることをより明確に表したものです。また、この二つの側面は分かちがたいものとして捉え、推進していく必要があります。交流及び共同学習は、障害のある子どもの自立と社会参加を促進するとともに、社会を構成する様々な人々と共に助け合い支え合って生きていくことを学ぶ機会となり、ひいては共生社会の形成に役立つものと言えます。

（文部科学省 特別支援教育について「交流及び共同学習ガイド」より一部抜粋）

※「障害」の表記については、著作を引用して使用しているため、原文どおりの記述。

○交流及び共同学習の推進について

※共生社会の形成に向けて、「合理的配慮」以外にも「交流及び共同学習」の視点は重要。

1 交流及び共同学習の意義

交流及び共同学習では、障がいのある子どもと障がいのない子どもが相互の触れ合いを通じて、豊かな人間性を育むとともに教科等の目標を達成していくものである。交流学級で行われる障がいのある子どもへの支援は、その子どもに対して有効であるだけでなく、交流学級の子どものにも有効であるという視点をもっておくことが重要である。それは一人一人のニーズに応じた教育を行うことであり、一人一人を大切にすることに繋がってくる。

2 交流及び共同学習を進めるにあたっての留意点

- 交流学級及び特別支援学級担任が、それぞれの学級の子どもの実態や特性を相互に正しく理解し合うことが重要である。そのためには、担任同士が学習の目的や意義も含めて十分話し込み、双方で共通認識を持つ必要がある。
- 交流学級での共同学習で、特別支援学級在籍の子ども（以下、対象の子ども）の目標を設定して、そのための支援を講じていくことも重要である。その際、在籍している特別支援学級の教育課程に位置付けている活動（自立活動等）の指導内容とリンクさせることで、教育効果があがってくる。
- 事前に交流学級担任とともに対象の子どもの目標等を確認し、活動の中で活躍できる場面、交流学級の子どものとの交流、共同学習の場面を設定する必要がある。
- 必要な場合は対象の子どもに対して、「合理的配慮」を考えていく。その際は、対象の子どもだけでなく他の子どもにとっても有効となる視点をもって考える。

(1) 特別支援学級在籍の子ども（以下、対象の子どもと記す）の実態把握

- 年度初めに子ども、保護者、前学年担任と面談をして対象の子どもの細かな実態について把握する。
- 個別の教育支援計画、個別の指導計画、諸検査結果等も参考に、年間を通した目標、指導方針を立てていく。なお、個別の教育支援計画等の作成にあたっては、保護者との共通理解を得るようにする。

(2) 教育課程の編成

- 年間目標、指導方針を具体化するために、自立活動の内容と時数を設定する。
- 年間目標を達成するために交流学級で受ける教科、領域を設定する。その際、特別支援学級で指導する内容とリンクさせることで、年間目標を効果的に達成できるものであるかを考慮する。
- 編成した特別支援学級の教育課程と交流学級の教育課程との整合性を図る。

(3) 学習する単元について交流学級担任との打ち合わせ

- 単元の目標を明確にする。その中で対象の子どもが自立活動で行っている活動の目標とリンクできるものがないか整理する。できるものがあれば共同学習の中で具体的な活動を考えていく。
- 対象の子どもができる活動を取り入れたり、交流学級の子どもとともに活動したりする場面を設定する。また、必要な合理的配慮を行う。
- 交流学級の子どもに対象の子どもの理解を促すだけでなく、両担任が手本となるような関わり方を積極的に行う。それとともに交流学級の子どもが関わる場面も設定する。

(4) 本時の学習

- 特別支援学級担任は、対象の子どもの目標達成に向けて直接指導にあたる。共同学習の場面では、できるだけ子ども同士の関わりができるよう、特別支援学級担任はサポートにあたるとともに、交流学級の子どもへの支援を行う。
- 交流学級担任は授業の中で、対象の子どもの頑張りを認めていくとともに、そのことを学級に広げていく。また、特別支援学級担任と同様、個別の声かけを行い交流学級の子どもに関わり方を示していく。

(5) 事後の学習

- 交流学級担任は対象の子どもが交流学級に参加していない時にも、対象の子どもの本単元での学習の頑張りや特別支援学級での学習についても話していく。
- 特別支援学級担任は対象の子どもが、本単元で習得した知識、技能、考え方を特別支援学級での学習や活動に生かしていく。
- 日常的に交流学級の子どもが特別支援学級に出かけるなどして、対象の子どもの理解だけでなく、他の特別支援学級の子どもや特別支援学級に対する理解を促進できるよう、交流及び共同学習の機会を設けていく。

※詳細は、平成27年3月熊本県教育委員会発行「特別支援教育充実ガイドブック～障がいのある子ども一人一人のニーズに応じた支援充実のために～」を参照のこと。